

霰ふる

泉鏡花

青空文庫

一

若いのと、少し年の上なると……

この二人ふたりの婦人おんなは、民也たみやのためには宿世すぐせからの縁えんと見える。ふとした時、思いも懸けない処へ、夢のように姿を露あらわす――

ここで、夢のように、と云うものの、実際はそれが夢だった事もないではない。けれども、夢の方は、また……と思うだけで、取り留めもなく、すぐに陽炎かげろうの乱るる如く、記憶うちの裡うちから乱れて行く。

しかし目まのあたり前ありあり、歴然ありありとその二人を見たのは、何時いつになっても忘れぬ。峰ながを視みめて、山の端はたに亘またんだ時もあり、岸はたづたいに川船に乗って船頭もなしに流れて行くのを見たり、揃そろって、すつと抜けて、二人が床の間の柱から出て来た事もある。

民也ここのは九ツ……十歳とおばかりの時に、はじめて知って、三十を越すまでに、四度よたびか五度いつたびは確たしかに逢あった。

これだと、随分中絶なかだえして、久しいようではあるけれども、自分には、さまでたまさか

のようには思えぬ。人は我が身体からだの一部分を、何年にも見ないで済みます場合が多いから……姿見に向わなければ、顔にも逢わないと同一おなじかも知れぬ。

で、見なくつても、逢わないでも、忘れもせねば思おも出いすまでもなく、何時いつも身に着いていると同様に、二個ふたつ、二人の姿もまた、十年見なかるうが、逢あわなかるうが、そんなに間あいだを隔へてたとは考えない。

が、つい近くは、近く、一昔前は矢張り前、道理に於て年を隔てない筈はないから、十から三十までとしても、その間あいだは言わずとも二十年経つのに、最初逢つた時から幾いくとせ歳さいを経ても、婦人おんな二人は何時なんじも違ちがわぬ、顔かお容かたちに年を取らず、些ちつとも変らず、同一おなじである。

水になり、空になり、面影は宿つても、虹のように、すつと映うつつて、忽たちまち消えて行く姿であるから、確しかと取留とりどめた事はないが——何時なんじでも二人連づれの——その一人は、年とし紀きの頃、どんな場合にも二十四五の上へは出ない……一人は十八九で、この少わい方は、ふつくりして、引ひ緊きつた肉づきの可いい、中ちゆう背ぜいで、……年上の方は、すらりとして、細いほど瘦うせている。

その背せいの高いのは、極めて、品の可よい艶つややかな円まるまげ鬚あらかで顕あらわれる。少わいのは時より々に髪よりが違ちがう、銀杏返いちようがえしの時もあつた、高島田の時もあつた、三輪みつわと云うのに結つてもいた。

そのかわり、衣服は年上の方が、紋着だったり、お召だったり、時にはしどけない伊達巻の寝着姿と変るのに、若いのは、屹と縞ものに定つて、帯をきちんと〆《し》めている。

二人とも色が白い。

が、少い方は、ほんのりして、もう一人のは沈んで見える。

その人柄、風采、姉妹ともつかず、主従でもなし、親しい中の友達とも見えず、従姉妹でもないらしい。

と思うばかりで、何故と云う次第は民也にも説明は出来ぬと云う。——何にしろ、遁れられない間と見えた。孰方か乳母の児で、乳姉妹。それとも嫂と弟嫁か、敵同士か、いずれ二重の幻影である。

時に、民也が、はじめてその姿を見たのは、揃つて二階からすらすらと降りる所。

で、彼が九ツか十の年、その日は、小学校の友達と二人で見た。

霰の降つた夜更の事——

山国の山を、町へ掛けて、戸外おもての夜の色は、部屋うちの裡からよく知れる。雲は暗からう……水はもの凄く白からう……空の所々に颯さつと藥研やげんのようなひびが入って、霰はその中から、銀河たまの珠を砕くが如く迸るほとばし。

ハタと止めば、その空の破れた処へ、むらむらとまた一重ひとえ冷い雲が累かさなりかかつて、薄墨色に縫ぬい合あわせる、と風さえ、そよとのもの音も、蜜蠟もつを以て固く封じた如く、乾坤寂けんこんやくとなる。……

建たて着つけの悪い戸、障子、雨戸も、カタリとも響かず。鼯いたちが覘のぞくような、鼠はらばが匍匐はらばつたような、切つて填はめた菱ひしの実が、ト、べつかつこをして、ぺろりと黒い舌を吐くような、いや、念の入いった、雑多な隙間、破やれ穴が、寒さにきりきりと齒を噛んで、呼吸いきを詰めて、うむと堪こらえて凍こご着えつくが、古家ふるいえの煤すすにむせると、時々遣切やりきれなくなつて、潜ひそめた嚏くしゃめ、ハツと噴ふきだ出しそうで不気味な真夜中。

板戸一つが直すぐ町の、店の八畳、古畳の真中に机を置いて対向さむかいに、洋燈ランプに額つぎあを突合つぎあわせた、友達と二人で、その国の地誌ちしりやく略と云う、学校の教科書を読んでいた。——その頃、風ふうをなして行われた試験間際に徹夜の勉強、終夜と称となえて、気の合つた同志が夜あか

しに演習おさらいをする、なまけものの節季仕事せつきと云うのである。

一枚……二枚、と両方で、ペエジを遣やッつ、取とッつして、眠気やッがましに声を出して読んでいたが、こう夜が更けて、可恐おそろしく陰氣とぎに閉とぎされると、低い声さえ、びりびりと氷を削るように唇つねへきしんで響といた。

常つねさんと云うお友達が、読み掛けたのを、フツと留とめて、

「民さん。」

と呼ぶ、……本を読んだとは、からりと調子が変わって、引ひき入れられそうに滅め入いって聞えた。

「……何な、
何なに、」

ト、一つ一つ、自分の睫まつげが、紙の上へばらばらと溢こぼれた、本の、片仮名まじりに落葉おちばする、山だの、谷だのをそのままの字を、熟じつと相手に読よませて、傍わきめ目も触ふらず視みていたのが、呼よばれて目を上げると、笠は破やぶれて、紙を被かぶせた、黄色に燻くすぶったほやの上へ、眉の優やさしい額を見せた、頬のあたりが、ぽつと白く、朧おぼろ夜に落ちた目めかざらと云う顔かお色。

「寂さびしいねえ。」

「ああ……」

「何時だねえ。」

「先刻さつぎ二時うったよ。眠くなつたの？」

対手あいては忽ち元氣づいた声を出して、

「何、眠いもんか……だけでもねえ、今時分になると寂しいねえ。」

「其処に皆寝ているもの……」

と云つた——大きな戸棚、と云つても先祖代々、刻み着けて何時いつが代だいにも動かした事のない、……その横ふすまの襖とえ一重の納戸の内には、民也の父と祖母とが寝ていた。

母は世はよを早うしたのである……

「常とこさんの許もとよりか寂さびしくはない。」

「どうして？」

「だって、君の内はお邸やしきだから、広い座敷を二つも三つも通らないと、母おつかさんや何か寝ている部屋へ行けないんだもの。この間、君の許とこで、徹夜をした時は、僕は、そりや、寂しかった……」

「でもね、僕とこン許もとは二階がないから……」

「二階が寂しい？」

と民也は真黒な天井を。……

常さんの目も、斉ひとしく仰いで、冷く光った。

三

「寂しいって、別に何でもないじゃないの。」

と云ったものの、両方で、机をずって、ごそごそと火鉢に嚙かじり着いて、ひつたりと寄合よりあわす。

炭は黒いが、今しがた継いだばかりで、尉じょうにもならず、火気の立ちぎわ。それよりも、徹夜の温習おさらいに、何よりか書入れかきいな夜半やはんの茶漬で忘れられぬ、大福めいた餡餅あんもを烘あぶったなごりの、餅網わびが、佗わびしく破蓮やればすの形で畳に飛んだ。……御馳走は十二時と云うと早はや済んで、——一つは二人ともそれがために勇気がないので。……

常さんは耳の白い頬を傾けて、民也の顔を覗のぞくようにしながら、

「でも、誰も居ないんだもの……君の許とこの二階は、広いのに、がらんとしている。……」
「病氣の時はね、お母つかさんが寝ていたんだよ。」

コツコツ、炭を火箸で突いて見たつけ、はっと止めて、目を一つ瞬いて、

「え、そして、亡くなった時、矢張、二階。」

「ううん……違う。」

とかぶりを掉つて、

「其処のね、奥……」

「小父さんの、寝ている許かい。……じゃ可いや。」と莞爾した。

「弱虫だなあ……」

「でも、小母さんは病氣の時寝ていたかつて、今は誰も居ないんじゃないか。」

と觀世振が挫げた体に、元氣なく話は戻る……

「常さんの許だつて、あの、広い座敷が、風はすうすう通つて、それで人っ子は居ませんよ。」

「それでも階下ばかりだもの。——二階は天井の上だろう、空に近いんだからね、高い所には何が居るか知れません。……」

「階下だつて……君の内でも、この間、僕が、あの空間を通つた時、吃驚したものがあつたじゃないか。」

「どんなものさ、」

「床の間に鎧よろいが飾かつてあつて、便所へ行く時に晁びか々光ひかつた……わッて、そう云つたのを覚えていないかい。」

「臆病おくびょうだね、……鎧は君、可お恐そいものが出たつて、あれを着て向むつて行けるんだぜ、向むつて、」

と氣勢きおつて肩かたを突つ構かまえ。

「こんな、寂さびしい時の、可こ恐おいものにはね、鎧なんか着たつて叶かなわないや……向むつて行きや、消きつえうちんだもの……これから冬の中頃になると、軒の下へ近く来るつてさ、あの雪ゆ女郎きじやう見みたいなもんだから、」

「そうかなあ、……雪女郎きじやうつて真個ほんにあるんだつてね。」

「勿論もちろんだつさ。」

「雨のびしよびしよ降る時には、油あぶら舐な坊主めぼうずだの、とうふ買かい小僧こぞうだのつて……あるだろう。」

「ある……」

「可い厭やだなあ。こんな、霰あられの降る晩には何にも別べつにないだろうか。」

「町の中には何にもないとき。それでも、人の行かない山寺だの、峰の堂だの、額の絵がね、霰がぱらぱらと降る時、ぱちくり瞬きをするんだって……」

「嘘を吐く……」

とそれでも常さんは瞬きした。からりと廂を鳴らしたのは、樋竹を迂る、落たまりの霰らしい。

「うそなもんか、それは真暗な時……ちようど今夜見たような時なんだね。それから……雲の底にお月様が真蒼に出ていて、そして、降る事があるだろう……そう云う時は、八田潟の鮒が皆首を出して打たれるって云うんです。」

「痛かろうなあ。」

「其処が化けるんだから、……皆、兜を着ているそうだよ。」

「じゃ、僕ン許の蓮池の緋鯉なんかどうするだろうね？」

其処には小船も浮べられる。が、穴のような真暗な場末の裏町を抜けて、大川に架けた、近道の、ぐらぐらと揺れる一錢橋と云うのを渡って、土塀ばかりで家の疎な、畠も池もところどころ、侍町を幾曲り、で、突当りの松の樹の中のその邸に行く、……常さん所々、家を思うにも、恰もこの時、二更の鐘の音、幽。

四

町なかの此処も同じ、一軒家の思がある。

民也は心もその池へ、目も遙々となつて恍惚しながら、

「蒼い鎧を着るだろうと思う。」

「真赤な鰭へ。凄い月で、紫色に透通ろうね。」

「其処へ玉のような霰が飛ぶんだ……」

「そして、八田潟の鮒と戦をしたら、何方が勝つ？……」

「そうだね、」

と真顔に引込まれて、

「緋鯉は立派だから大将だろうが、鮒は雑兵でも数が多いよ……潟一杯なんだもの。」

「蛙は何方の味方をする。」

「君の池の？」

「ああ、」

「そりや同じ所に住んでるから、緋鯉に属つくが当あたり前まえだけれどもね、君が、よくお飯まんま粒つぶで、糸で釣つり上げちや投げるだろう。ブツと咽喉のどを膨らまして、ぐるりと目を円くして腹を立つもの……鰯の味方になろうも知れない。」

「あ、また降るよ……」

凄まじい霰の音、八方から乱打みだれうつや、大屋根の石もからからと転げそいで、雲の渦うずく影が入いって、洋燈ランブの笠が暗くなつた。

「按摩あんまの笛が聞えなくなつてから、三度目だねえ。」

「矢が飛ぶ。」

「弾たまが走るんだね。」

「緋鯉と鰯とが戦うんだよ。」

「紫の池と、黒い潟で……」

「薔しとみを一寸開ちよつとけてみようか、」

と魅せられた体ていで、ト立とうとした。

民也は急に慌しく、

「お止し？……」

「でも、何だか暗い中で、ひらひら真黒なのに交つて、緋だか、紫だか、飛んでいそうで、面白いもの、」

「面白くはないよ……可恐いよ。」

「何故？」

「だって、緋だの、紫だの、暗い中に、霰あられに交つて——それだと電いなびかりがしているようだもの……その藪しとみをこんな時に開けると、そりや可恐いぜ。」

さあ……これから海が荒れるぞ、と云う前触れに、廂ひさしよりか背の高い、大な海坊主が、海から出て来て、町の中を歩行あるいていてね……人が覗のぞくと、蛇のように腰を曲げて、その窓から覗にらみ返して、よくも見たな、よくも見たな、と云うそうだから。」

「嘘だ！ 嘘ばかり。」

「真個ほんとだよ、霰あられだって、半分は、その海坊主が蹴け上げて来る、波の※しづきが交つてゐるんだとさ

。」

「へえ？」

と常さんは未だ腑に落ちないか、立掛けた膝たちかを落さなかつた……

霰は屋根を駈廻る。

民也は心に恐怖のある時、その葎を開けさしたくなかった。

母がまだ存生の時だった。……一夏、日の暮方から凄じい雷雨があつた……電

光絶間なく、雨は車軸を流して、荒金の地の車は、轟きながら奈落の底に沈むと思う。

——雨宿りに駈込んだ知合の男が一人と、内中、この店に居すくまった。十時を過ぎ

た頃、一呼吸吐かせて、ものの音は静まったが、裾を捲いて、雷神を乗せながら、赤

黒に黄を交えた雲が虚空へ、舞い舞い上つて、昇る氣勢に、雨が、さあと小止みになる。

その喜びを告さんため、神棚に燈火を点じようとして立った父が、そのまま色をかえ

て立窘んだ。

ひい、と泣いて雲に透る、……あわれに、悲しげな、何とも異様な声が、人々の耳をも

胸をも突貫いて響いたのである。

五

笛を吹く……と皆思つた。笛もある限り悲哀を籠めて、呼吸の続くだけ長く、かつ細く

叫ぶらしい。

雷鳴に、殆ど聾い^{ほとん}な^しんとした人々の耳に、驚破^{すわ}や、天地一つの声。

誰^{たれ}もその声の長さだけ、気を閉じて呼吸を詰めたが、引く呼吸はその声の一度止むまでは続かなかつた。

皆戦^{おの}いた。

ヒイと尾を微^{かす}かに、その声が切れた、と思うと、雨がひたりと止んで、また二度めの声^が聞えた。

「鳥か。」

「否^{いいや}。」

「何だろうの。」

祖母と、父と、その客^{ことば}と言を交^{ことば}わしたが、その言葉も、晃々^{きらきら}と、震えて動いて、目を遮^いる電^{いなづ}光^{かり}は隙間を射た。

「近い。」

「直^じき其処だ。」

と云う。叫ぶ声は、確かに筋向いの二階家の、軒下のあたりと覺えた。

それが三声めになると、泣くような、怨むような、呻吟くような、苦み蹴くかと思う意味が明かに籠って来て、新らしくまた耳を劈く……

「見よう、」

年少くて屈竟なその客は、身震いして、すつくと立って、内中で止めるのも肯かないで、タン、ド、ドン！ とその、其処の蓐を開けた。――

「何、」

と此処まで話した時、常さんは堅くなつて火鉢を掴んだ。

「その時の事を思出すもの、外に何が居ようも知れない時、その蓐を開けるのは。」
と民也是言う。

却説、大雷の後の稀有なる悲鳴を聞いた夜、客が蓐を開けようとした時の人々の顔は……年月を長く経ても眼前見るような、いずれも石を以て刻みなした如きものであった。

蓐を上げると、格子戸を上へ切つた……それも鳴るか、簫の笛の如き形した窓のような

隙間があつて、衝と電光に照される。

と思うと、引緊めるような、柔かな母の両の手が強く民也の背に掛つた。既に膝に乗つて、囁り着いていた小児は、それなり、薄青い襟を分けて、真白な胸の中へ、頬も口も揉み込むと、恍惚となつて、もう一度、ひよいと母親の腹の内へ安置され終んぬで、トもんどりを打つて手足を一つに縮めた処は、滝を分けて、すんと別の国へ出た趣がある、……そして、透通る胸の、暖かな、鮮血の美しさ。真紅の花の咲満ちた、雲の白い花園に、朗らかな月の映るよ、とその浴衣の色を見たのであつた。
が、その時までの可恐しさ。――

「常さん、今君が薔を開けて、何かが覗いたつて、僕は潜込む懷中がないんだもの……」

簾の窓から覗いた客は、何も見えなかつた、と云いながら、真蒼になつていた。
その夜から、筋向うのその土蔵附の二階家に、一人気が違つた婦があつたのである。
寂寞と霰が止む。

民也は、ふと我に返つたようになって、

「去年、母^{おつか}さんがなくなつたからね……」

ひ^ひお^おけ^け お^おも^もて^て そ^そむ^む
火桶の面を背けると、机に降^{ふりこ}込んだ霞があつた。

じゆうと火の中にも溶けた音。

「勉強しようね、僕は父^{おとつ}さんがないんだよ。さあ、」

鮎^{あづな}が兜を着ると云う。……

「八田潟の処を読もう。」

と常さんは机の向うに居直つた。

ラン^{ラン}プ^プ
洋燈が、じいじいと鳴る。

その時であつた。

六

二階の階^{はしご}子^ご壇^{だん}の一番上の一壇目……と思う処へ、欄^{らん}間^まの柱を真黒に、くツきりと空^{そら}にして、袖を欄干^{てすり}摺^ずれに……その時は、濃いお納戸と、薄い茶と、左右に両方、棲^つま^まさ^さきを

揃えて裾を踏みくぐむようにして、円鬚まげと島田の対丈ついたけに、面影白く、ふツと立った、両ふ個たりの見も知らぬ婦人おんながある。

トその色も……薄いながら、判然はつきりと煤すすの中に、塵を払ってくつきりと鮮麗あざやかな姿が、二人が机に向つた横手、畳たたみ数二畳ばかり隔へだてた処に、寒き夜なれば、ぴったり閉めた襖一枚……台所へ続くだだっ広い板敷との隔へだてになる……出入口ではいりぐちの扉ひらきがあつて、むしやむしやと巖いわの根に蘭を描いたが、年数算さんするに堪たえず、で深山みやまの色に燻くすほった、引手ひきての傍わきに、嬰あかんぼ児の掌てのひらの形して、ふちのめくれた穴が開いた——その穴から、件の板敷を、向うの反ほ古張ごはりの古壁へ突つき当あたつて、ぎりりと曲つて、直角に菟藟こんにやくいろ色の干乾ひからびた階子壇……十とおばかり、遙かに穴の如くに高いその真上。

即ち襖の破目やれめを透とおして、一つ突当おりまがつて、折屈おりまがつた上に、たとえば月の影に、一刷彩ひとしはいろどつた如く見えたのである。

トンと云う。

と思うと、トントントンと軽い柔かな音に連れて、棲つまが揺れ揺れ、揃もすそった裳が、柳の二ふ枝えだ摩なくよう……すらすらと段を下りた。

肩を揃えて、雛の絵に見る……袖を左右から重ねた中に、どちらの手だろう、手燭か、

台か、裸火の蠟燭を捧げていた。

蠟の火は白く燃えた。

胸のあたりに蒼味が射す。

頬のかかり白々と、中にも、円鬚に結ったその細面の気高く品の可い女性

の、纏れた鬢の露ばかり、面妻れした横顔を、瞬きもしない双の瞳に宿した途端に、ス

ーと下りて、板の間で、もの優しく肩が動くと、その蠟の火が、件の絵襖の穴を覗く……

その火が、洋燈の心の中へ、※と入って、一つになったようだった。

やあ！ 開けると思う。

「きやッ、」

と叫んで、友達が、前へ、背後の納戸へ刎込んだ。

口も利けず……民也もその身体へ重なり合って、父の寝た枕頭へ突伏した。

ここの障子は、幼いものの夜更しを守って、寒いに一枚開けたまま、霞の中にも、父と

祖母の情の夢は、紙一重の遮るさえなく、机のあたりに通ったのであった。

父は夢だ、と云って笑った、……祖母もともに起きて出で、火鉢の上には、再び芳しい

香が満つる、餅網がかかったのである。

茶の煮えた時、真夜中にまた霰が来た。

後で、常さんと語^{かたり}合^あうと……二人の見たのは、しかもそれが、錦絵を板^{はん}に合わせたように同一かつたのである。

これが、民也の、ともすれば、フト出逢う、二人の姿の最初^{はじめ}であつた。

常さんの、三日ばかり学校を休んだのはさる事ながら、民也は、それが夢でなくとも、さまで可^{おそろし}恐^{あやし}いとも可^{あえ}怪^えいとも思わぬ。

敢^{あえ}て思わぬ、と云うではないが、こうしたあやしみには、その時分馴^なれていた。

毎夜の如く、内井戸の釣瓶^{つるべ}の、人手を借らず鳴つたのも聞く……

轆轤^{ろくろ}が軋^{きし}んで、ギイと云うと、キリキリと二つばかり井戸縄の擦^{すれ}合^あう音して、少^{しば}須^{らく}し

て、トンと幽^{かす}かに水に響く。

極^{きま}つたように、そのあとを、ちよきちよきと細^{こま}かに俎^{まないた}を刻む音。時雨^{しぐれ}の頃から尚^なお冴^さえて、ひとり寝の燈火^{ともしび}を消した枕^{かよ}に通う。

七

続いて、台所を、ことごと云うあしおと登音がして、板の間へ掛る。——この板の間へ、その時の二人の姿は来たのであるが——また……實際より、寝ていて思う板の間の広い事。民也は心に、これを板の間ケ原だ、と称となえた。

伝え言う……孫右衛門と名づけた気の可い小父さんが、独酌どくしやくの酔醒よいざめに、我がねたを首あげて見る寒さかな、と来山張らいざんはりの屏風越しに、魂消たまげた首を出して覗いたと聞く。

台所の豪傑ごうけつばら、座敷方ざしきがたのせんじよう上、栄耀えよう榮華えいがに憤いきどおりを発し、しゃ討て、緋縮緬ひぢりめん小褌こづまの前を奪取ばいとれとて、竈將軍かまどが押取おつとった柄杓ひしやくの采配、火吹竹の貝を吹いて、鍋釜の鎧武者が、のんのんのんと押出おしだしたとある……板の間ケ原や、古戦場。

襖一重は一騎打いつきうちで、座敷方では切所せつしよを防いだ、其処の一段低いのも面白い。

トその気で、頬杖をつく民也に取つては、寢床から見るその板の間は、遥々はるばるとしたものであった。

あしおと登音は其処を通つて、一寸止んで、やがて、トントンと壇あがを上る、と高い空で、すらりと響く襖の開く音。

「ああ、二階のお婆さんだ。」

と、熟じつと耳を澄ますと、少時しばらくして、

「ええん。」

と云う咳せきばらい。

「今度は二階のお爺さん。」

この二人は、母の父母で、同家ひとついえに二階住居ずまいで、睦むつまじく暮したが、民也のものを覚えて後、母に先だつて、前後して亡くなられた……

その人たちを、ここにあるもののように、あらぬ聲音を考しえて、咳しわぶきを聞く耳には、人ひとけ気勢はいのない二階から、手燭して、するすると壇を下りた二人の姿を、さまで可おそろし恐いとは思わなかつた。

却かえつて、日を経るふに従つて、物語を聞きさした如く、床ゆかしく、可なつか懐しく、身に染みるようになつたのである。……

霰あられが降れば思おもい凝こる。……

そうした折よ、もう時雨の頃から、その一二年は約束のように、井戸の響、板の間の登音、人なき二階の襖の開くのを聞馴ききなれたが、婦おんなの姿は、当時また多日しばらくの間見えなかつた。白菊の咲く頃、大屋根へ出て、棟むね瓦がわらをひらりと跨またいで、高く、高く、雲の白きが、微かすかに動いて、瑠璃色るりいろに澄渡すみわたった空を仰ぐ時は、あの、夕立の夜を思出おもいだす……そして、

美しく清らかな母の懷にある幼児の身にあこがれた。

この屋根と相向つて、真蒼な流を隔てた薄紫の山がある。

医王山。

頂を虚空に連ねて、雪の白銀の光を放つて、遮る樹立の影もないのは、名にし負う白山である。

やや低く、山の腰にその流を繞らして、萌黄まじりの朱の袖を、梯の如く宿したのは、ついで、まのあたり近い峰、向山と人は呼ぶ。

その裾を長く曳いた蔭に、円い姿見の如く、八田瀉の波、一所の水が澄む。

島かと思う白帆に離れて、山の端の岬の形、にっと出た端に、鶴の背に、緑の被衣させた風情の松がある。

遙かに望んでも、その枝の下は、一筵、掃清めたか、と塵も留めぬ。

ああ山の中に葬った、母のおくつきは彼処に近い。

その松の蔭に、その後、時々二人して佇むように、民也は思った、が、母にはそうした女のつれはなかったのである。

月の冴ゆる夜は、峰に向つた二階の縁の四枚の障子に、それか、あらぬか、松影射しぬ

……戸袋かけて床の間へ。……

また前に言った、もの凄い暗い夜も、年経て、なつかしい人を思えば、
降^{ふり}積^{つも}る霰^{あられ}も、
白菊。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 泉鏡花集 黒壁」ちくま文庫、筑摩書房

2006（平成18）年10月10日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十四卷」岩波書店

1942（昭和17）年3月10日第1刷発行

初出：「太陽」

1912（大正元）年11月号

※表題は底本では、「霰《あられ》ふる」となっています。

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2015年10月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

霰ふる

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>